

萩ノ段遺跡調査概報

1 9 7 6

掛川市教育委員会

- 1 本書は昭和52年1月4日から27日間にわたって実施した掛川市萩ノ段遺跡発掘調査の概報である。
- 2 発掘調査は萩ノ段遺跡発掘調査事業として国および静岡県からの補助を得て、掛川市教育委員会が実施したものである。
- 3 発掘調査団の構成は次のとおりである。

調査担当者 久永春男・岩井克允

調査員 内藤次郎・鶴田彦四郎・鶴田喜清
牧野彦一・森田勝三・木下克己
七原恵史・雨宮万里子・塚木晴美
占田敏晴

補助員 仲屋栄一・松本行弘・野口英生
大場満明・岩井和志・岩井正治
染葉剛志・横柴樹由・佐藤昭則

- 4 執筆分担は久永春男が第2章・第5章1を、岩井克允が第1章・第3章・第4章・第5章2を担当した。
- 5 掲載した写真は久永春男・岩井克允・内藤次郎・鶴田喜清が撮影したもので、実測図の作成は岩井克允が行なった。
- 6 調査の実施にあたって土地所有者の木下雄一氏・隣地の木下照次氏・木下重夫氏・杉山喜一氏など多くの方々にご協力いただいた。

第1章 萩ノ段遺跡の位置

萩ノ段遺跡は掛川市街地から北西へ約13キロメートル原野谷川を遡った掛川市原里地区の萩ノ段と呼ばれる台地のなかほどに位置する。標高80メートル内外、萩ノ段台地南方の原野川沖積地との比高は約28メートルである。地籍は掛川市原里字萩1000番ノ5に属する。



押図第1 萩ノ段遺跡の位置 (○印)

1 : 50,000

第2章 萩ノ段遺跡の地形

原野谷川の流域においては上位・中位・下位三段の段丘がみとめられる。原野附近においては上位段丘は標高90～100m内外、中位段丘は70～80m内外、下位段丘は55～60m内外である。萩ノ段遺跡が存在するのは、その中位段丘であって、東西両側を谷に切られ、舌状台地状をなす。遺跡はその台地中央を南北に走る微隆起した稜線部ならびに台地間縁地域に分布している。



押図第2 萩ノ段遺跡周辺の地形（矢印は萩ノ段遺跡）

1 : 10,000

第3章 経 過

萩ノ段遺跡は静岡県蘆薈文化財包蔵地地名表にNo. 724。縄文時代の遺物包蔵地として登録されている遺跡で、昭和118年仲屋栄一氏の土器・石器の地表採集によって知られるにいった。

昭和50年4月土地所有者の木下雄一氏から茶畑の改植計画があるので必要ならば調査してほしい旨、掛川市教育委員会に申入れがあった。掛川市教育委員会では直ちに現地を踏査して遺跡の有無を知るため予備調査を行なった。そして遺跡が一画に広がっているのが確認されたので、昭和51年度の国および静岡県の補助事業として昭和52年1月4日から27日間にわたって調査を行なった。

調査にあたっては昨年度改植済の中央部分をはきんで、東側を東区、西側を西区と名付け、両区の周囲をめぐって幅1メートルのトレンチを設定し、遺跡の広がりを確認するとともに、両区域内には2メートル方眼のグリッドを設定して、まず千鳥にそのグリッドを発掘することにした。そして遺構が現われた場合はその部分を掘り広げて調査した。

なお、調査にあたって、周囲が茶畑なので排土は調査区内で処理しなければならない。そこで、トレンチの発掘を先に実施し、次にグリッドを調査した。

発掘した遺構は合計56である。そして縄文時代3時期、弥生時代2時期にわたっていた。

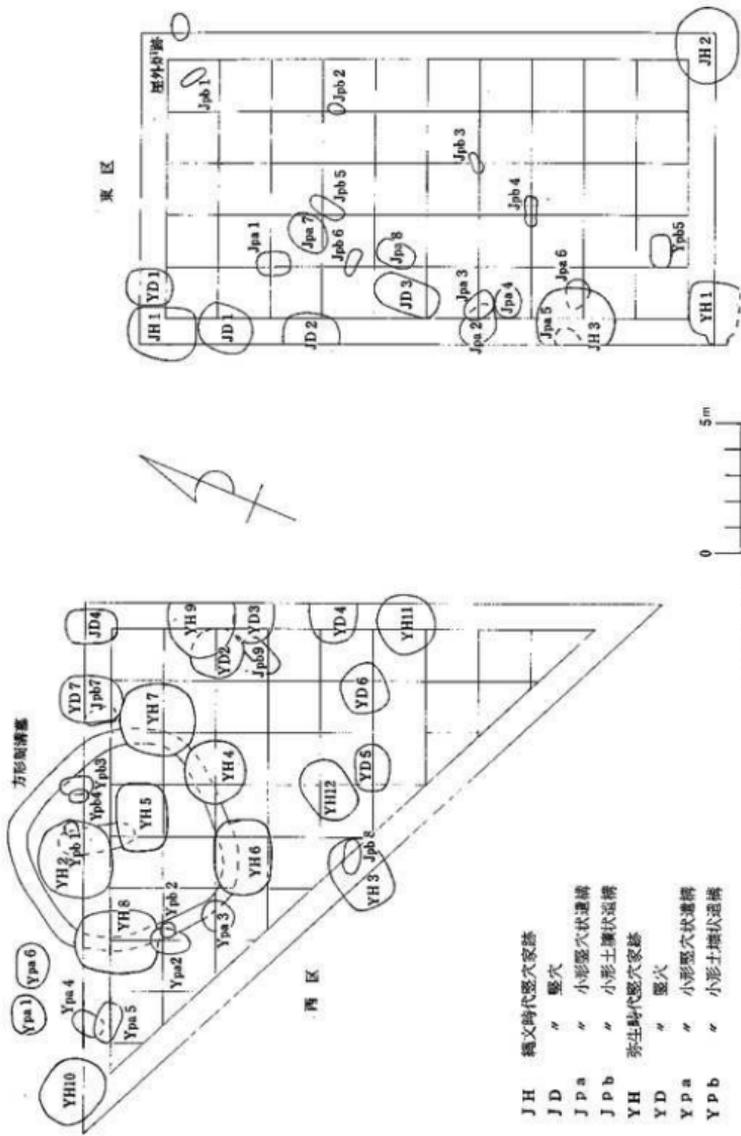
第4章 遺 構

1 縄文時代の遺構

柱穴のある竪穴家跡が3軒、柱穴はないがおそらく屋根を葺いたとみられる竪穴が4軒、浅い小形竪穴状の遺構が8基、小形土壇状の遺構が9基、屋外炉跡1基が見いだされた。これらの遺構の平面形、規模、時期等は表第1の縄文時代の遺構一覧表に示した。

2 弥生時代の遺構

柱穴のある竪穴家跡が12軒、柱穴はないがおそらく屋根を葺いたとみられる竪穴7軒、小形竪穴状の遺構6基、小形土壇状の遺構5基、隅円方形周溝墓1基が見いだされた。これらの遺構の平面形、規模、時期等は表第2の弥生時代の遺構一覧表に示した。



- | | |
|-----|----------|
| JH | 縄文時代竪穴家跡 |
| JD | 竪穴 |
| Jpa | 小形竪穴状遺構 |
| Jpb | 小形土圍状遺構 |
| YH | 弥生時代竪穴家跡 |
| YD | 竪穴 |
| Ypa | 小形竪穴状遺構 |
| Ypb | 小形土圍状遺構 |

棒図第3 発掘区と遺構の分布

表第1 縄文時代の遺構一覧表

遺構番号	平面形	規模 cm	時 期	備 考
		長軸×短軸		
JH 1	楕円形	257×204	縄文時代 中期 前葉	主柱穴 7
	"	287×237	" " 後葉	" 12
	"	295×	" " "	" 調査部分 6
JD 1	楕円形	207×177		
	"	210×		
	"	256×128	縄文時代 中期 前葉	
	"	197×138	" " 後葉	
JP a 1	楕円形	129×90	縄文時代 早期 前半	
	"	180×130	" " "	
	"	129×90	" " "	
	"	120×96		
	"	113×83	縄文時代 早期 前半	
	"	114×85	" " "	
	"	172×135	" 中期 後葉	
	"	152×93	" 早期 前半	
JP b 1	長楕円形	110×34		
	楕円形	63×38		
	長楕円形	84×38	縄文時代 早期 前半	
	"	114×45	" 中期 前葉	
	"	140×62	" " "	
	"	105×49		
	"	170×127	縄文時代 早期 前半	
	"	144×61	" " "	
	"	165×87	" 中期 後葉	
黒外知跡	楕円形	103×66		

表第2 弥生時代の遺構一覧表

遺構番号	平面形	規模 cm	時 期	備 考	
		長軸×短軸			
YH	1	楕円形	237×	弥生時代 後期	調査部分 主柱穴 3
	2	"	307×280	" 中期	" 6
	3	"	280×204	" "	" 4
	4	"	238×231	" "	" 4
	5	"	267×191	" "	" 6
	6	"	284×220	" "	" 12
	7	"	288×273	" "	" 8
	8	"	316×242	" "	" 11
	9	"	×257	" 後期	調査部分 4
	10	"	264×215	" 中期	" 6
	11	"	235×214	" 後期	" 8
	12	"	246×179	" 中期	" 4
YD	1	楕円形	175×140	弥生時代 中期	
	2	"	200×180	" "	
	3	"	160×	" "	
	4	"	140×	" "	
	5	"	180×131	弥生時代 中期	
	6	"	187×172	" "	
	7	"	228×180	" "	
YPa	1	楕円形	145×118	" "	
	2	"	142×85	弥生時代 中期	
	3	円形	106×100	" 後期	
	4	楕円形	93×79	" 中期	
	5	"	152×90	" "	
	6	"	176×122	" "	
YPb	1	楕円形	53×50	弥生時代 後期	
	2	円形	57×57	" "	
	3	楕円形	123×57	" "	
	4	"	74×56	" "	
	5	"	126×82	" "	
方形周溝墓	隅門方形	820×820	" 中期		

第 5 章 遺 物

1 土 器

土器には縄文式土器と弥生式土器とがある。

縄文式土器は 3 群に分けられる。

第 1 群土器 (図版第 7 (1)) 小ピット J P b 3・J P b 7・J P b 8 から出土している。縄文文化早期前半の捺型文土器であって、すべて薄手の造りである。山形捺型文、格子目捺型文の 2 種類の文様がある。

第 2 群土器 (図版第 7 (2)) J H 1 号堅穴がこの時期の遺構である。関東地方の五穀台式土器の地方型としてよからう。静岡県内では古くから柏産遺跡における出土例が知られている。

第 3 群土器 (図版第 8 (1)) J H 3 号堅穴がこの時期の遺構である。縄文文化中期後葉の咲畑式土器であって、遠江から尾張にかけて、信濃境の山岳地帯を除く地域に分布している。加曾利 E 2 式土器を少量同伴していた。

弥生式土器は 2 群に分けられる。

第 1 群土器 (図版第 8 (2)) 堅穴 Y H 2 号、Y H 4 号、Y H 6 号ならびに隅四方形周溝墓の周溝および中央土槽の底面から出土している。条痕を主とした整形施文によって特徴づけられる。この地方の縄文式土器の終末期の水神平式土器の伝統を顕著に残す土器と、目のあらい櫛状器具による横線を施した壺、すなわち明瞭な弥生式土器系統の土器とから成り、純水神平式土器として総括される土器型式であって、尾張のそれとは地域差がみとめられる。弥生式中期初葉におくべきものである。

第 2 群土器 (図版第 9 (1)(2)) Y H 1 号堅穴がこの時期の遺構である。この地方の弥生後期前半に流行した菊川式土器である。発見された資料の限りでは壺の文様はすべて縄文であって、櫛描きまたは寛描きの斜線が施文の過半を占める原野谷川中・下流地域にくらべて特色を示し、東隣の菊川上流地域と下流地域においてみられる分布現象と授を一にする。

2 石 器

出土した遺物のうち石器は少量で、合計 27 点である。これらの種類、時期等は表第 3 に示した。

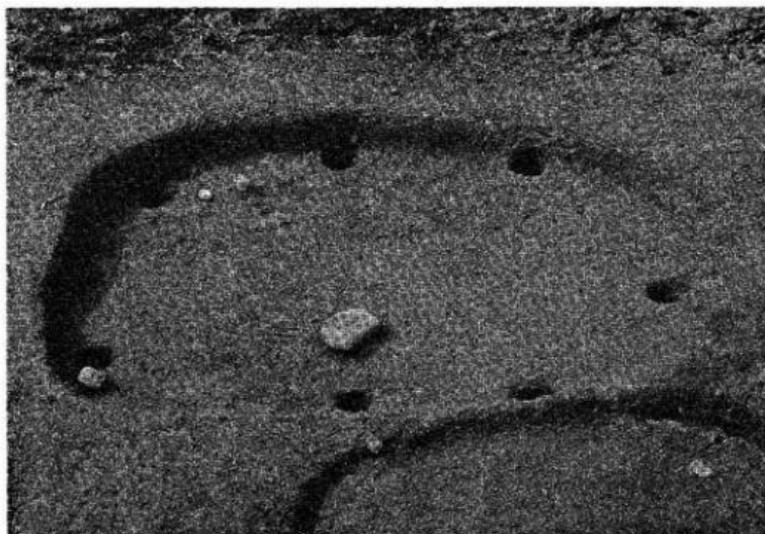
表第 3 石器 一 覧 表

縄 文 時 代				弥 生 時 代			
種 類	数 量	時 期		種 類	数 量	時 期	
石 匙	1	中 期	後 葉	石 鏃	4	中 期	前 半
石 錘	1	”	”	”	2	中 期	後 期
石 鉄	3	”	”	石 斧	1	中 期	”
石 斧	1	”	前 葉	”	6	後 期	”
石 刃	2	”	”	石 刃	1	中 期	”
”	2	”	後 葉	”	1	後 期	”
中期前葉 (第 2 群土器)				中期前葉 (第 1 群土器)			
中期後葉 (第 3 群土器)				後期前葉 (第 2 群土器)			

図版 第1

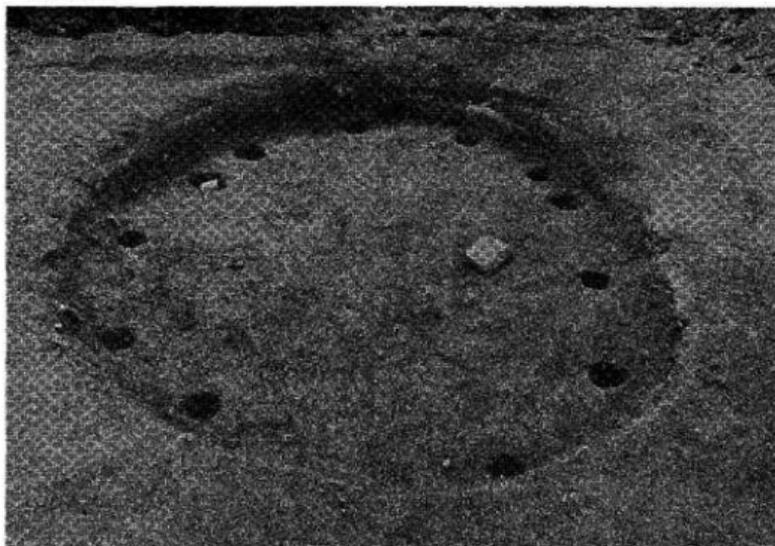


(1) 道 跡 全 景 (北西から) 中央右寄り茶の木を伐根したところ

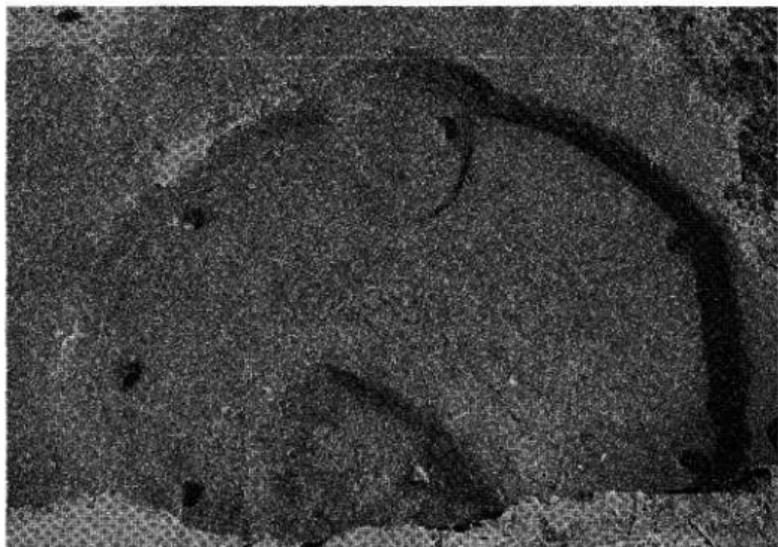


(2) JH1号壺穴家跡 (東から)

図版 第2



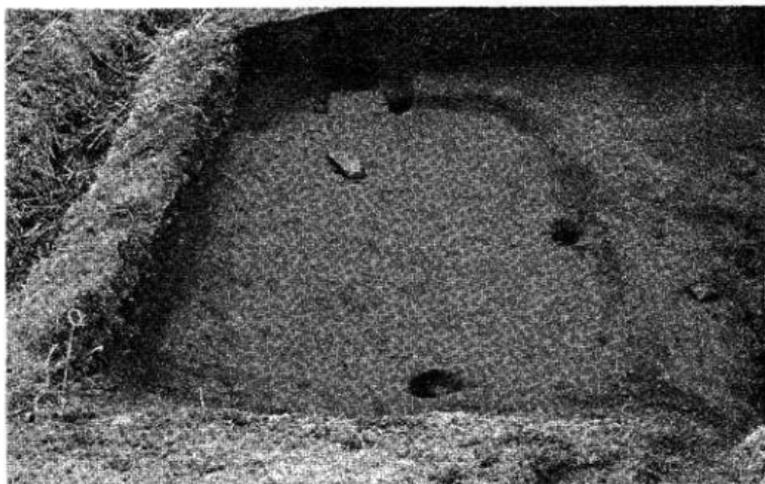
(1) JH2号 墨穴家跡(西から)



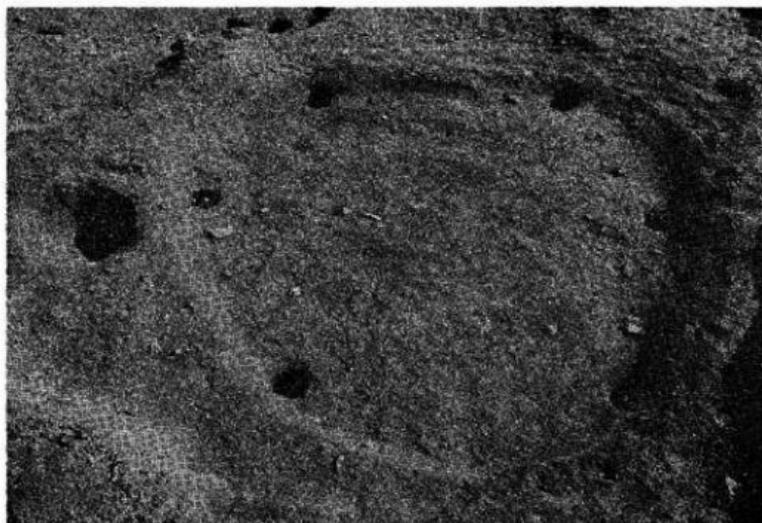
(2) JH3号 墨穴家跡(西から)



図版 第3

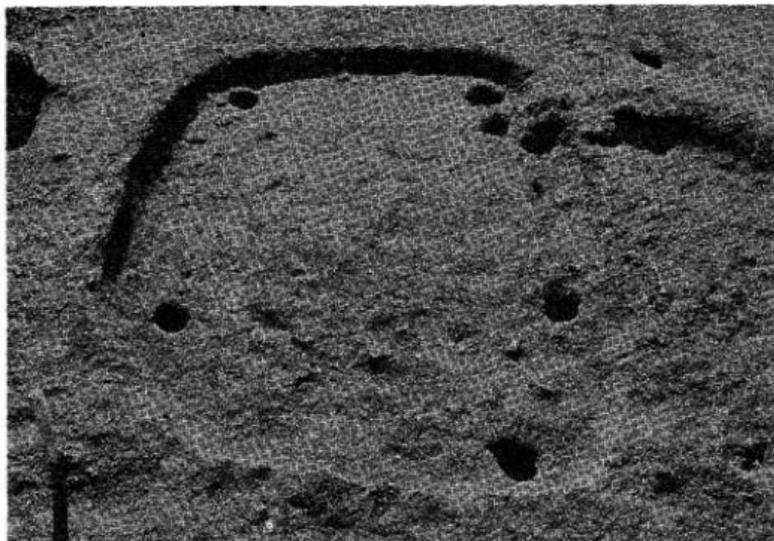


(1) YH1号 罅穴家跡(東から)

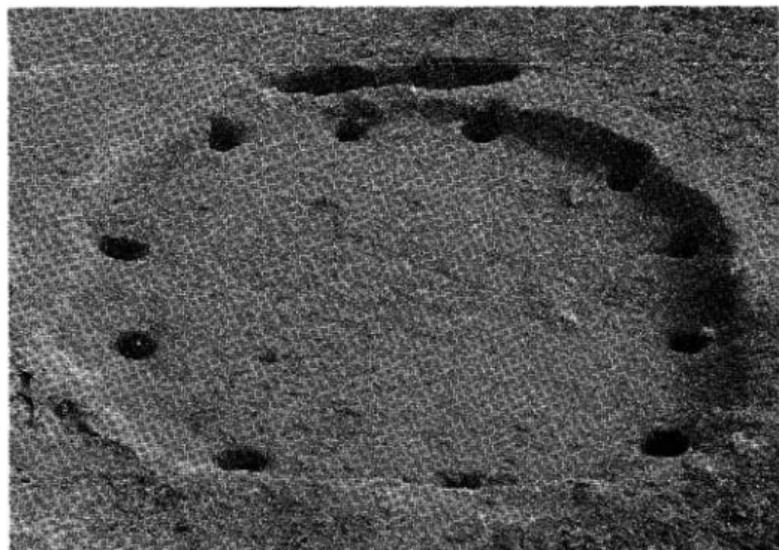


(2) YH2号 罅穴家跡(北から)

図版 第4



(1) YH 5号 罌穴家跡(西から)



(2) YH 8号 罌穴家跡(北から)



図版 第5



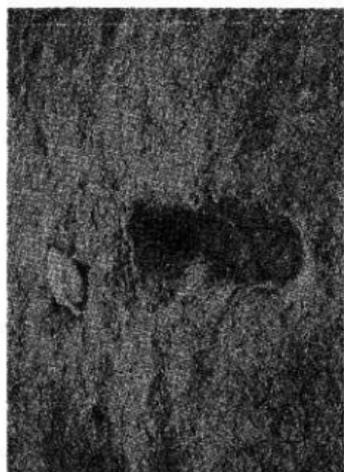
58 J P b 11 脈外砂脈 (北から)



60 Y P b 1 小形圓り込み穴 (北から)



61 J P a 2 (右上)3(右下)4(左) 小形脈状遺構 (東から)



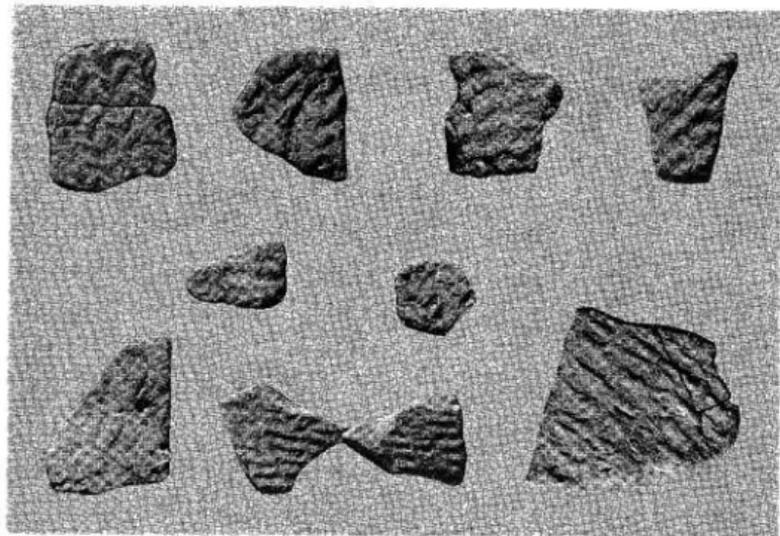
62 J P b 3 小形土塊状遺構 (東から)



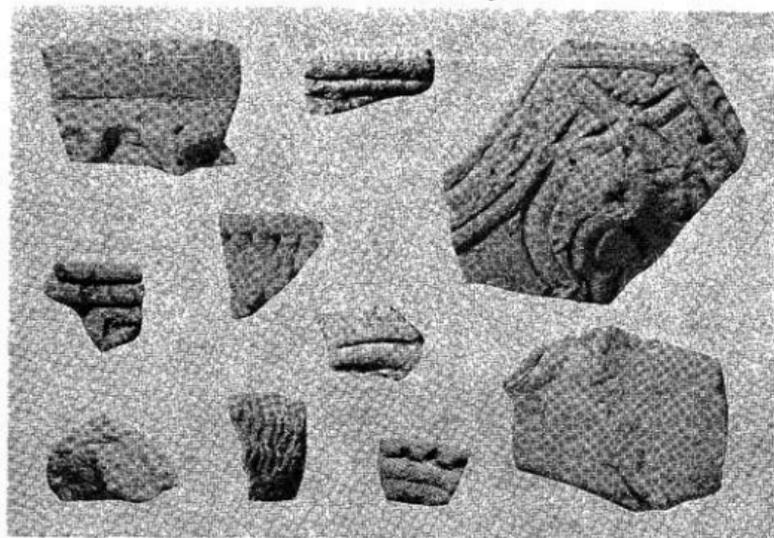


開田万形可隆基(北から)

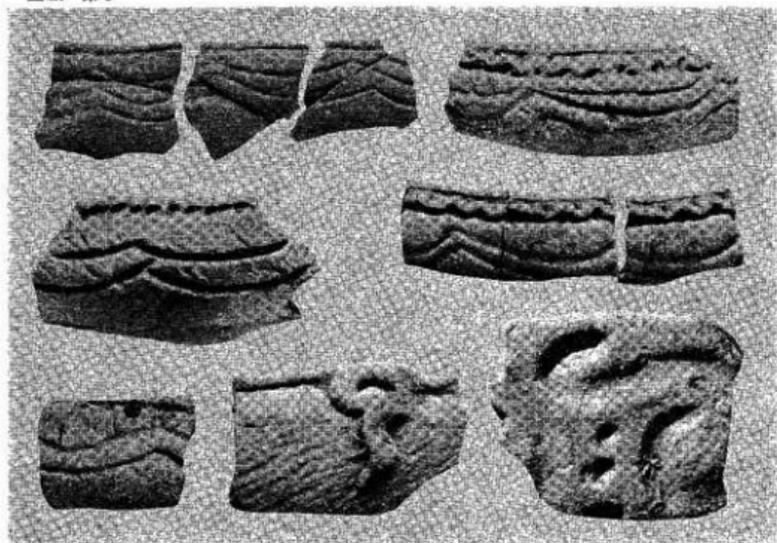
圖版 第7



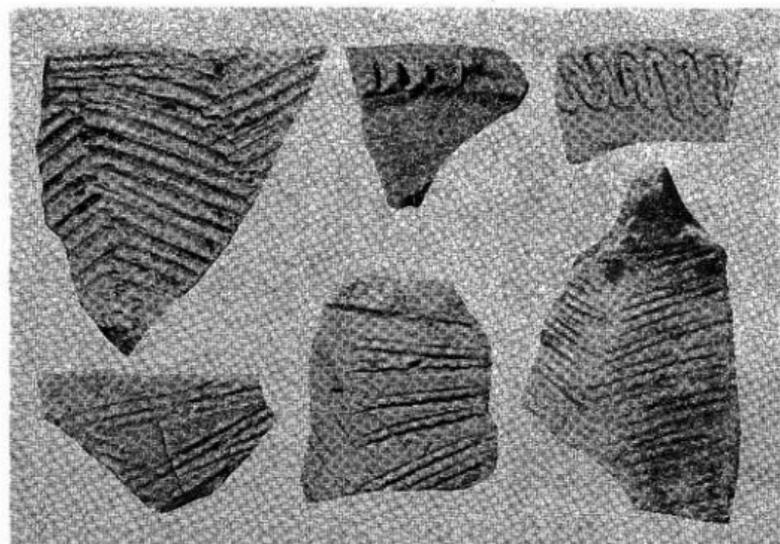
(1) 繩文式土器第1群 $\frac{2}{3}$ 大



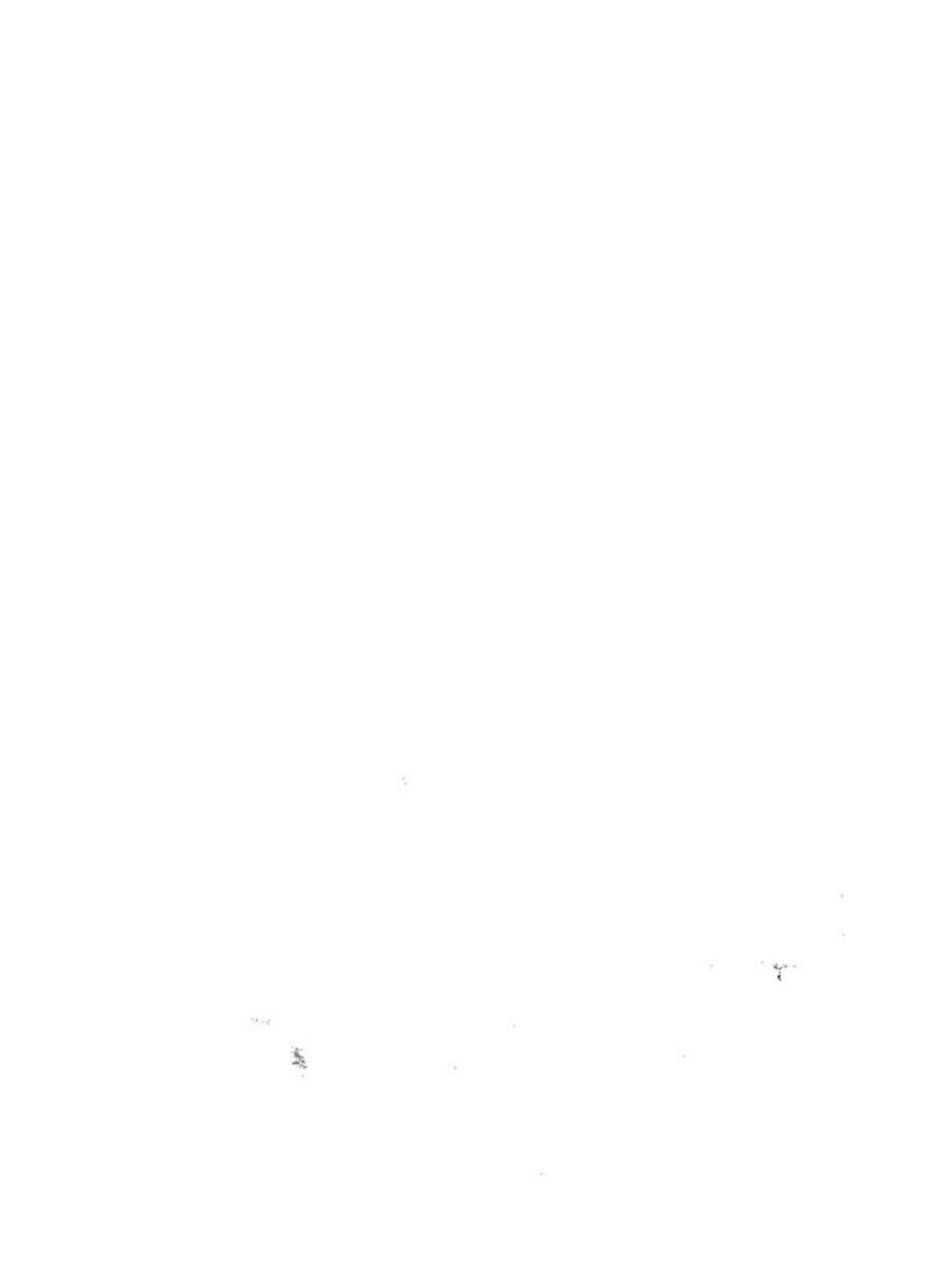
(2) 繩文式土器第2群 $\frac{2}{3}$ 大



(1) 縄文式上器第 3 群 $\frac{2}{3}$ 大

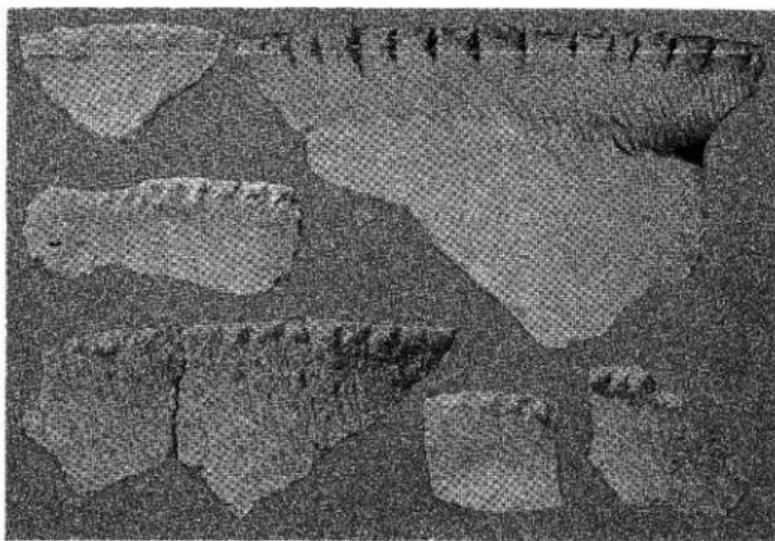


(2) 弥生式土器第 1 群 $\frac{2}{3}$ 大





(1) 弥生式土器第2群 $\frac{2}{3}$ 大



(2) 弥生式土器第2群 $\frac{2}{3}$ 大



萩ノ段遺跡調査概報

昭和52年3月25日 印刷
昭和52年3月31日 発行

発行 掛川市教育委員会
掛川市掛川1144-1
TEL (05372) 2-2111 (代)
印刷 株式会社 關 明 堂

